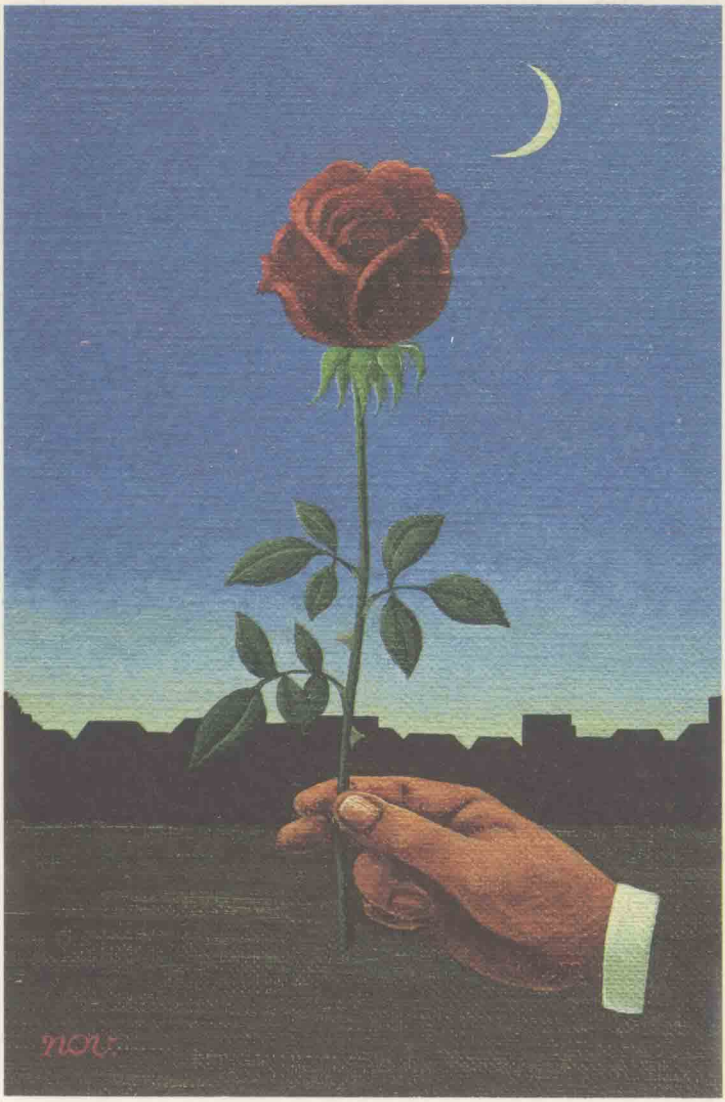
サイゴン・ティをもう一杯

村松友視



コン・ティをもう一杯

村松友視

講談社

サイゴン・ティをもう一杯
著者＝村松友視（むらまつともみ）
昭和五十七年十月二十日　第一刷発行

発行者＝三木　章
発行所＝株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所＝豊国印刷株式会社
製本所＝株式会社大進堂
定価八九〇円
©村松友視　昭和五十七年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-200263-9(0)（文2）

サイゴン・ティをもう一杯

装丁　矢吹申彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

ヨロイ戸を思いきり引きあげると、今日もまたギラギラと照りつけるつもりの太陽が、イサムの目を真正面から射た。イサムは朝の太陽をちょっと睨み返し、ヨロイ戸のほこりで汚れた手をはたいた。それを合図のようにむっくりと起きあがったチビ太と三角が、ひとりごとみたいな鳴き声を発しながら陽の光のなかへ出てきた。これでメンバーはそろったわけだ……イサムは、両腕を大きく振りあげてから、二、三度、空手の正拳突きの仕種をくり返した。

ホロをかぶせた車が、イサムたちの朝のスタートを待っている。ガレージを改造して店にしてしまい、その中二階に寝泊りするようになっているから、本来、ガレージのなかにいるはずの車が外へはじき出されたかたちになっているのだ。

草色のホロを引きはがすと、イサムの愛車である、黄色いハイルーフが姿を見せた。イサムは、この瞬間を気に入っている。さあ行くぜ……そんなセリフを吐いて愛馬に鞍を乗せる西部劇の主人公のような気分を、車からホロを引きはがすときに味わうのだ。

エンジンをかけ、横のドアをあけると、心得たようにチビ太と三角が飛び乗ってきた。

（さて……）

イサムは呟やきを声に出し、ポケットから取り出したセンベイを半分に割って後部座席へ放り投げた。チビ太と三角は、ゆっくりと半分ずつ食べはじめた。とくに興奮してうばい合うこ

とがないのは、毎朝のセンベイは半分ずつ、あとは市場での仕入れが終って帰ってくるまでのお楽しみと覚悟しているからだ。イサムは、チビ太と三角がセンベイをゆっくり食べている姿を見て目をほそめ、いったん車から降りてガレージの中へ入っていった。

ヨロイ戸を引きあげると、ガレージの中のどのあたりまで光がとどくか……これは、この店をつくったときからイサムが気にした問題だった。そして、イサムの計算通り、春夏秋冬いずれの季節になっても、朝の太陽の光が中二階のベッドまでとどくことはなかった。

中二階にはアンナが眠っている。どんなことがあっても、アンナの朝の眠りをさまたげたくない……それがイサムの気持だった。朝の市場へ自分だけが行くのだが、陽の光のためにアンナが起きてしまったのでは何もならない。アンナにはゆっくり眠ってもらって、店が開店してからの時間をまかせなければならないのだ。

イサムは中二階への階段を半分ばかりのぼって、アンナが眠っているけはいをたしかめた。そして、足音をころして下まで降りて外へ出ると、静かにヨロイ戸を引き下げた。アンナが目覚めることをそれだけ気にしていながら、最初にヨロイ戸を引きあげるときは、イサムはかならず思いきり力を入れてしまう。それはいったいなぜなのか、イサムは自分でも分らなかった。あのときだけ、アンナに対するいたわりが消えてしまうのだろうか。それにしても、最初に力いっぱいヨロイ戸を引きあげる音で、アンナが一度も目を覚ましたことがないのも不思議だった。

（アンナとオレは、けっこうまくいってるってことか……）

それが、いつもイサムの答えになった。車にもどり、後部座席にうずくまるチビ太と三角にちらりと目をやったイサムは、ギアを入れてゆっくりとアクセルを踏みこんだ。

裏道、抜け道をえらんで市場へ向うコースは、イサムの頭の中には五種類ほどあったが、きょうはそのどれをもえらばず、表通りから甲州街道へぬけていった。朝、市場へのコースをあれこれとアレンジするのは、イサムにとっては一種の眠けざましのようなものだった。きょうはなぜか奇妙に頭が冴えていて、凝ったコースをとらなくても大丈夫という気がしていた。頭が冴えているのは、きのうの定休日でゆっくり軀をやすめたためかもしれなかった。

(軀を一日やすめると、翌日がちがうような年になったのかな……)

イサムは、ハンドルをにぎっている自分の手の甲をみつめた。右手の甲にある小さなアザが、ちかごろ少し大きくなったように感じていたのだった。

(また、少し大きくなったかな……)

イサムは、ハンドルをにぎった右手をいったん放し、せわしく指を開閉した。そしてあらためて右手の甲をながめたが、アザはやはり少し大きくなっているように見えた。

八重トルコキキョウのピンク、白、紫を合わせて百三十本、金竜五十本、浜ナデシコ四つ、俗にムラブルと呼ばれる紫のグラジオラス二十本、ヒマワリ三十本、カスピア五十本、そしてバラでは、黄色いエバーゴールド八十本、白いパスカリ五十本、濃いピンクのカリーナ五十本……イサムが、花市場で仕入れたのはそれだけだった。

花の種類が激減する夏のセリは、春や秋にくらべてあきらかに活気がない。二、三十人の花

屋が集まってくるのだが、和気藹々とした雰囲気がただようだけで、ピンと張りつめた熱気というものがないのだ。
「夏場は、やっぱり花屋の季節じゃないねえ、吉さん……」
境さんが、自分のコーヒーを手にもってイサムの横の席へうつってきた。花市場のすぐ脇にある「ラマンチャ」は、市場に出入りする花屋たちの溜り場のようになっている。市場でしか顔を合わせない友だちというのもいて、境さんもそのひとりだった。境さんは、本名は中島というのだが、武蔵境で店をやっているということで、花屋の電話帳には境さんとして出ている。花屋の電話帳は、本名よりも店を出している土地名が先に記されているのだ。関さんという人もいるが、彼の店は武蔵関だ。イサムは花屋仲間には吉さんと呼ばれている。それは、イサムの店が吉祥寺の一角にあるからなのである。
「そうだねえ、ブラック・ティもないし」
「あ、そうか。吉さんは、ブラック・ティをかならずもってくもんね。あんな高いバラ、売る相手がいなけりゃ無駄になるだろうに」
「そりゃまあ、そうだね」
「それとも、吉さんが好きなの」
「うん、まあ、それもあるけど……」
「あ、わかった、奥さんでしょう」
「ああ、彼女もいちおう好きだけど……」

「それとも、ブラック・ティ専門のお客さんがいるわけなの」
「そう、ひとりね……」
「へえ、ブルジョワだねえ」
境さんは目をまるくし、コーヒーを一気に飲み込んだ。
「ねえねえ、ブラック・ティが好きなお客ってさ、男性かしら、それとも女なの」
境さんの声を聞きつけた緑ヶ丘の緑さんが、二人の話に割って入った。
「そのお客は、男だよ」
「あら、男性なの、ステキね。ブラック・ティってさ、あたしも大好きなの。しぶい色してて、ほんとに大人っぽいのよね」
「だって、緑さんがブラック・ティを仕入れたの、見たことないよ」
境さんが、いじわるそうな目をつくって言うと、緑さんはちょっと伏目がちになってから睨み返し、
「あたしはね、ここでながめればいいの」
と言って、同意をもとめるようにイサムをのぞきこんだ。だが、イサムの目が宙に投げられているのを見て、緑さんはがっかりしたように押しだまった。
ブラック・ティは、バラを品種改良したものだが、その名の通り紅茶色をしている。赤いバラがドライフラワーとなって色が沈んでゆくときの一瞬にも似て、地味ではあるが品のある色合いだ。アンナはブラック・ティという花はかけ合せだからあまり好きでないと言っていた

が、ブラック・ティの色合は気に入っているようで、
「こういう色のブラウス、欲しいな」
と呟いていたことがあった。
ブラック・ティは、五年ほど前に日本人が作った種類だ。そのブラック・ティが市場のセリに出てきたとき、イサムはとくにその色合にこだわることはなかった。そして、何ということもなく、めずらしい花として仕入れたあと、店へ帰ってからブラック・ティの色に見入ってしまった。それは、ブラック・ティの色に魅せられたとかいうのではなく、その色をどこかで見たような気がしたのだった。その記憶をたぐろうと、ブラック・ティを手にとっていたとき、
「あれ、ブラック・ティのある店なんて、めずらしいね」
中年の痩せた紳士が店へ入ってきて、イサムの手からブラック・ティを取りあげてながめ、ぜんぶを買っていってしまったのだった。イサムの軀のなかでよみがえろうとした色合は、もういちど沈澱するように軀の底へおさまってしまい、イサムは記憶をたぐるきっかけを失ってしまったのである。
「ねえ、吉さん、おかしいわよあんた」
「え」
「このごろさ、やたらと考えごとすることが多いでしょ、そんな年でもあるまいに、変よ」
「そうかなあ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あ、そういえば、わりに考えごとしてること多いよ」
「境さんにも、そう見えるか……」
「誰にでも、見えるわよ。ねえ」
緑さんは、今度は境さんに同意をもとめた。境さんがそれにうなずいたのでいきおいを得た緑さんは、そんなことで上機嫌になったのか、コーヒーをもう一杯注文し、
「夏場はブラック・ティがないから残念ね」
そう言ってイサムをなぐさめるような顔になった。
「あっても、赤っぽくて小さくて、ブラック・ティって感じじゃないしな」
境さんが合の手を入れ、もみ手をして外を見た。そして、境さんは何かを見つけて苦々しい表情をつくった。イサムが、境さんの目を追って外を見ると、グレーのライトバンに仕入れた花を積んでいる小柄なうしろ姿が見えた。
「あれ、上神(かみがみ)さん、もう帰るのかな」
イサムは腰を浮かせ、手をふろうとした。すると、境さんがその手をおさえ、
「吉さん、あの人と仲がいいのかい」
「いや、べつにそういうわけじゃないけど、境さんは気に入らないようだね。何かあったの」
「何かあったってわけじゃないけど、どうも虫が好かないんでね」
「花屋が虫が好かないなんて言っちゃ駄目じゃない」
緑さんは、自分の駄ジャレを気に入ったというふうに、二人を交互にながめた。

「虫に好かれるのが花……」
うたうように言った緑さんは、
「じゃ、またね」
二杯分のコーヒー代をテーブルの上へおいて、しなをつくるようなあいさつをして出ていった。それにはじかれたように、境さんも腰をあげ、
「気をつけた方がいいよ」
と言って外の上神さんをアゴでしゃくり、やはりコーヒー代をテーブルの上において「ラマンチャ」を出ていった。
ライトバンのなかへ花をおさめた上神さんは、空をにらむようにふりあおいだあと、「ラマンチャ」の方へゆっくりと歩き出した。暗いガラスの自動ドアが開くと、正面に上神さんが立っていた。暗いガラスのこちら側からは分らなかったが、上神さんのポロシャツは、不思議な色合いをしている。迷彩服をこまかくしたという感じの柄をしていて、全体のトーンはグリーンに近い。上神さんは、イサムに気づくとにっこり笑ってそばへ坐った。
「どう、景気は」
「あいかわらずですよ」
何ということもない会話のさなかでも、上神さんの目は四方にするどくくばられる。アイスコーヒーを注文したあと、タバコを取り出してくわえながら、今度はくるりとうしろを向いて外を見たりしている。こういう仕種のいちいちが、境さんなどには気に入らないのだろう。イ

サムの目にも、上神さんのこういう目くばりは、どこかひとの神経を疲れさせるところがあるにちがいないと映った。だが、イサムはこの上神さんに対して、いやな感じをおぼえたことはなかった。それに、上神さんのこういう仕種は、わざとそうしているのではなさそうなのだ。わざとでないとすれば、いつの日にか身についてしまった仕種ということになるのだが……。

「上神さんて、いつも何かに追われてるみたいに見えますね」

「そうかな……」

「いや、本当に追われてるんじゃないだろうけど、役どころとしては、追われる男って感じですね」

「追われる男……」

「逃亡者ってテレビあったでしょ、あれですよ。つねにサスペンスをかかえて生きる男ってやつ」

「吉さんは、芝居が好きなの」

「ああ、芝居は好きです」

「何かやってたことあるの」

「ええ、ちょっとね」

「役者かなんか……」

「タイプを見てくださいよ、これが役者のタイプですか」

「そりゃまあね」
「そのセリフもひどいなあ」
「何やってたの、芝居の」
「装置の方を、ちょっとね……」
「ほう、大道具かなんか」
「まあ、そんなもんですね」
「それで、それやめて花屋に」
「ええ」
「変ってるねえ」
「いやべつに変ってませんよ、店だって芝居の装置みたいなもんですから」
「なるほど、芝居の装置か……そんなもんかねえ」
「上神さんは、花屋の前は何だったんです」
「サラリーマン、ふつうのサラリーマン」
上神さんの答え方はあまりにも早く、かねて用意していたというふうだった。たぶん、これは嘘だろう……イサムは心の中でそう呟やいた。
花屋になるケースは、大雑把(ざっぱ)にいって三つのケースがある。一つは、親が花屋であるケース、つまりは二代目だ。こういう人々は、生れたときから花を商品として見ている。だから、生きている花と造花との区別があまり判然としていないタイプが多い。もう一つは、丁稚(でっち)から

たたきあげた職人が、やっと自分の店をもつというケース。こういう連中は、目標は大きな店をもつことだから、売上げの成績に対するこだわりがすさまじい。目標のためにあまりにも精力的で、花という生(な)まな存在に対する思い入れが、あまりにも少ない人々だ。のこった一つは、さまざまの理由によって偶然に花屋になっている種族……イサムは、自分がこのケースのなかの一人であることもあるが、こういう種族にいちばん馴染みをおぼえている。いま、言葉をにごすかわりに、とりあえず単純な嘘をついたらしい上神さんも、もちろんこの種族のなかの一人であり、境さんも緑さんも同じ類いの人々だ。花に対して不思議なこだわりや愛着をもっているという点では、これらの連中がもっとも信用できるとイサムは思っている。

「さて、そろそろ……」

上神さんは、境さんと緑さんがコーヒー代をおいた上へ、自分の分をかさねて立ちあがった。イサムは、そのぜんぶをわしづかみにしてレジへ向い、上神さんと一緒に自動ドアの前へ立った。ジーッという音がして暗いガラス戸がひらき、午前中の強い陽ざしが目を射た。イサムの目の中に、緑色の光の輪がいくつもできた。一瞬、目を閉じたイサムが目をあけると、「ラマンチャ」をならんで出たはずの上神さんの姿がなかった。上神さんは、すでにライトバンの運転席へ乗り込んでいて、イサムに向ってかるく手をあげ車をスタートさせた。

(やっぱり、逃亡者かな……)

イサムは、走り去ってゆく上神さんのライトバンを目で追いながら、なぜともなくそんなふうに思った。「ラマンチャ」の冷房のなかにかなりながくいたせいか、照りつける夏の太陽が

イサムには心地よかった。

店の前へ止めたハイルーフの横の扉を引きあけると、チビ太と三角が走り出て、店のなかへ走っていった。自分たちの朝の食事を、すでにアンナが用意していることを見越したような、自信にあふれる走りっぷりだった。それを目で追ったイサムは、車をバックさせて共同駐車場へ入れ、Gパンのポケットに両手を突っ込んで、ゆっくりと店の正面までやってきた。

イサムは、Gパンの尻のポケットからタバコを取り出してくわえ、ライターで火をつけるとふたたび両手をポケットに突っ込んだ。くわえタバコの烟(けむり)が風にもっていかれた。イサムは店を真正面からにらみすえるようにしていた。

市場から帰ってきたあと、こうやって真正面から店をにらむのは、イサムのながくつづいている習慣だった。それは、店という自分の作品をながめる、舞台装置家の目ともいえるかもしれない。そして、この舞台の中にいる主役、アンナの出番を目論(もくろ)む演出家のまなざしかもしれない。いずれにしても、イサムがこの店を、アンナのための舞台として作りあげたのはまぎれもないことだった。

「お帰んなさい」

イサムが作った舞台の奥から、手をふりながらアンナが出てきた。

(なかなかいい出だ……)

イサムは上機嫌になった。ガレージをそのまま利用し、店の外からは中二階の部屋がまった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com